

## 人間的諸科学・生活世界・現象学

馬場喜敬

(昭和61年9月30日受理)

### Die humanistische Wissenschaften, Lebenswelt u. Phänomenologie —Ein Prolog od. eine Prognose—

Yoshiyuki BABA

(Received September 30, 1986)

#### 0-1 〔序言〕

本稿は1984年度“特別研究”として申請した折りに、[新カント学派の再評価における現象学的認識論の諸問題(以下Aと略称)]という表現になっていたのを、上記「人間的諸科学・生活世界・現象学」(以下Bと略称)としたものである。

Aの申請時の付言には次のようにも述べた。「これは近時進行中の、ヨーロッパの、特に近代思想の見直し作業の一環でもあり、さきのカント論とも当然連動する」と、従ってこれは、新カント派の源泉と考えてよいカントそのものの批判的再検討——カント解釈の第4期という視点において——をも含む筈のものである。すなわち、先の「ポーペとカント」をさらに遡源して次のようなテーマが浮上する。——「ボーリングブロークよりカントまで——ロック、ヒューム、カントという通説的哲学史の認識論的系譜付けに反して」(以下Cと略称)。また一方で、これまたいまのべた通説的哲学史がくりかえす認識論上のヒューム—カント関係、すなわちヒュームの懐疑によって独断の仮睡からさめたカントにおける先験的観念論の誕生、ということの中で強調される両者の理性認識の差異は、「プロレゴメナ」が語る第二のヒューム・ショックから見れば(これに対して先のを第一のヒューム・ショックともいう)予想以上に親縁性が認められること、などに注意を向ける「カント批判哲学と宗教論——理性認識のSchrankeとGrenze」(以下Dと略称)も浮上するであろう。そしてCもDも、ともに新カント派の再検討にも影響を与えることがらを含んでいるのであ

教養部哲学第一研究室

るから、当然、Aの射程内に入ってしまうのであるが、しかしこれらはここではひとまず措くことにする。

ところでさらに「ヨーロッパ思想史の見直し」ということが強調されるならば、それはとりわけ、思想〔史〕・哲学〔史〕の背景にあるキリスト教こそ、主題の圏域にあるべきものである。換言すれば、思想も(哲学も)真空のなかにおいて生れるのではなく、キリスト教社会の現実のなかに営まれ、生い育ってきたのであり、キリスト教社会の現実との融和・葛藤の表現であるのであるから、その見直し作業は、この点を見落した従来の方法にのみ頼っていたのでは、所詮所期の目的を達成することはできない。(無力な方法は現実にはねかえされて意味を消失する!)

この点に関し、知識社会学は有力な武器となる。したがって、知識社会的と考えられる若干の主題表現が——それをあえて書きつらねないが——E、F以下として可能となるであろう。

#### 0-1-2

表題Bは上記のことを展望した上でのことであるが、なお「新カント派」が表面にでていないことに一言すべきであろう。内容的な関連を二三あつづけると、

新カント派の科学論に<人間的諸科学>が対応する。但し新カント派科学論を超越する方向においてである。前者の科学論は二分化的科学論を特質とする。中でも西南ドイツ学派を例にとると次のような二分化がみられる。すなわちヴィンデルバント W. Windelband における法則定立的科学 nomothetische Wissenschaft と個性記述的科学 idiographische W. (又は自然科学と歴史科学)、リッカート H. Rickert におけ

る自然科学と文化科学, など。(他に自然科学と精神科学, 自然科学と社会科学, 現実科学と規範科学などの二分化もその周辺にみられる)。後者すなわち<人間的諸科学>の科学論が二分化的科学論を克服する過程は次のように略述される。

自然科学のいう事実がすでに価値付帯的なものである(別のいい方をすれば, 観察的事実の理論的負荷性 theory-ladenness)ということからはじまり, その客観的自立性は失なわれて, 自然科学は**仮設**にもとづいた人間の知の冒険という面が浮上する。科学は**原理**に基づいた一定の完結した知識の体系ではない。これまで科学の原理とよばれていたものはすべて仮設であって, 科学の**原理批判**が哲学の仕事である。哲学は科学の原理批判として, 新しい仮設による知の新しい活動を促進する。別言すれば, 新しい科学のパラダイムをつくり出す(科学革命といわれるものである)。これに照応して仮設は**モデル**におきかえられる。

このモデルという概念は, 自然科学と対立させられてきた諸科学において, マックス・ウェーバー Max Weber の理想型 Idealtypus を代表として, その有効性が論議されてきたものに該当する。

この二つのことは, 科学の新しい本質, <人間的諸科学>の意味をすでに予知している。科学は対象によって本質を規定されるべきものではなく, 人間が, 行為論的な地平で, その意味を規定すべきところのものである。

ところで<人間的諸科学>は sciences humaines, human sciences を邦訳したものであるが, 必ずしも適訳ではない。しかし人間科学としたのでは一層不適当であろう。これは, これまでの用法からみて, 単に人間を対象とする経験的科学的印象を与える。なお人文主義的科学的又は人文科学という対応もあることを付記。

### 0-1-3

Bのあと二つの語(又は概念), 「生活世界」と「現象学」については次の短章を記すにとどめる。

生活世界は<人間的諸科学>の地平をなすものであり, 現象学は, 生活世界が<人間的諸科学>の地平であることの意味付けと根拠付けを行う。

### 0-2

本稿は, 課題の大きさからみて, ここでは差し当り, “Ein Prolog oder eine Prognose”(プロローグ或いは予告的報文)にとどまらざるをえない。かつて, イマヌエル・カント Immanuel Kant (1724-1804) が度々行った(1956/57, 1964/65などの「公開講義・草案予告」)あの方式にならうものである。

序論的な本章のナンバーは0からはじまっている。1より先は本論の展開に与えられるが, その数字がどこまでのびるかはまだ決定されていないが, 最大限100以下に抑えることは, 論稿の構成上必要とされるであろう。

各正ナンバーの次にくる数字については, この0及びすでに草稿は書かれている1~5ほどの部分についても, 同様に, 決定は留保されねばならない。(本稿では, このあと, 便宜上2-1, O. Liebmann と新カント派素描掲げる)。

本稿に付論〔01-1〕を加えたことも, カントの方式にならったものである。それがカッシーラー E. Cassirer であることは, 本稿の問題の核心の一部に触れていることにもなる。

なお, 本題の本格的発表は, カントの場合の如く“講義”(Königsberg Universität での)ではありえないので, おそらく一冊の著作の形をとることになろう。

× ×

### 2-1 [O. Liebmann, そして新カント派素描]

新カント派のはじまりには O. リープマン (Otto Liebmann, 1840~1912) の名が結びついている。

かれの著作「カントとその亜流」Kant und die Epigonen は1865年の刊行である。のちにヴィンデルバントが「カントを理解することはカントを超えることである」と語り, それはあたかも新カント派の代表的モットーの如くみなされるに至ったが, それでもなお新カント派のはじまりはかれの著作に帰せられる。

これまで支配的であった思弁的・観念論的学派が, 内部的抗争によって解消し, 没落し去ったとき, (また) これまでのオリンピアの神々(大哲学者たち……筆者注)の争いによって混乱し, それと同じく, 実践的・政治的領域での苛酷な幻滅により甚だしく調子を損ない, (そして) 公共の通念が, 理性のヘゲモニーへの信仰を失い, (そしてまた) 本職

の学者世界が思弁的幻覚の酔いからさめて、極度に散文的な現実渴望に献身しはじめたとき、(かくしてまた)自然科学が一つの面から、歴史研究が他の面において、より多く感激的な、またまとめて滋養分のある食べものを約束したとき、われわれは一瞬、あたかも哲学は完全に特殊科学の土壌にすいこまれてしまったかの如くに、若くは、もっぱら歴史家の表現の対象としての過去におきわすられた財となってしまうかのようにみえた。(リープマン, 上掲書)

かくしてリープマンはこの著作の各章の末尾に、「それ故われわれはカントに還らねばならない」Also muß auf Kant zurückgegangen werden. と記すことになる。

「リープマンが垂流とよんだものは、カント以後のすべての哲学である。観念論的方向：フィヒテ、シェリング、ヘーゲル。現実論的：ヘルバート。経験論的：フリース。超絶論的：ショーペンハウエル。」\*

\* Hans-Lwdrig Ollig : Der Neukantianismus Stuttgart, 1979. (s. 10)

なおこれは小冊子ながら、新カント派の展望に便利である。以下その見取図を掲げる(これに欠けているもの、例えば Vaihinger など、についてはその理由とともに本稿の対象となる)。

1. EINLEITUNG
2. BIOBIBLIOGRAPHISCHER ABRISSE
- 2.1 *Der frühe Neukantianismus*
- 2.1.1 O. Liebmann
- 2.1.2 F. A. Lange
- 2.2 *Der klassische Neukantianismus*
- 2.2.1 A. Riehl
- 2.2.2 Die Marburger Schule
- 2.2.2.1 H. Cohen
- 2.2.2.2 P. Natortp
- 2.2.2.3 E. Cassirer
- 2.2.2.4 Weitere Denker aus dem Umkreis der Marburger Schule
- 2.2.3 Die südwestdeutsche Schule
- 2.2.3.1 W. Windelband
- 2.2.3.2 H. Rickert
- 2.2.3.3 E. Lask

- 2.2.3.4 Weitere Denker aus dem Umkreis der südwestdeutschen Schule
- 2.3 *Der Ausgang des jüngeren Neukantianismus*
- 2.3.1 B. Bauch
- 2.3.2 J. Cohn
- 2.3.3 R. Höningwald
- 2.4 *Der Neoneokantianismus*
- 2.4.1 R. Zocher
- 2.4.2 W. Cramer
- 2.4.3 H. Wagner
3. DIE PROBLEMANZEIGE DES NEUKANTIANISMUS
- 3.1 *Der Beitrag des Neukantianismus zu Problemen der theoretischen Philosophie*
- 3.1.1 Neukantianische Kategorienlehren
- 3.1.2 Die Auseinandersetzung des Marburger Neukantianismus mit der modernen Physik
- 3.1.3 Die südwestdeutsche Schule und die Theorie der Geisteswissenschaften
- 3.2 *Der Beitrag des Neukantianismus zu Problemen der praktischen Philosophie*
- 3.2.1 Die Sozialphilosophie des Neukantianismus
- 3.2.2 Max Weber und der Werturteilsstreit
- 3.2.3 Die Rechtsphilosophie des Neukantianismus
- 3.2.4 Die Erziehungsphilosophie des Neukantianismus
- 3.3 *Die Kunstphilosophie des Neukantianismus*
- 3.4 *Die Religionsphilosophie des Neukantianismus*
- 3.5 *Die linguistische Diskussion des Programms der klassischen neukantianischen Geltungstheorie*

× ×

01-1 [E. Cassirer 1874~1945]

「プラトンはかつて、驚嘆することはもともと哲学的情動であり、われわれはそこにすべての哲学することの根をみるべきである、と語った。もし事情がその

通りなら、いかなる諸対象が最初に人間の驚嘆をよびさまし、それによって人間を哲学的思考の軌道にみちびいたのであったか、という問いが生ずることになる。」

この書き出しではじまる E. カッシーラーの「文化科学の論理学」のための第一論文（「文化科学の対象」）〔1942〕は、従来の哲学史の批判的再検討であり、それにおいて新カント派内部からの、新カント派超克の一つの試みをよみとることができる。それは発表年代が示く如く、カッシーラー晩年のものであり、前期と異なる後期カッシーラーに独自の思惟の展開をみることができるといえる。

重要な点は 1—S. 9 にあらわれる。

「ヴィコの『歴史哲学』の独自の功績は、この歴史哲学が、内容的に、歴史的過程及びその個々の位相のリズムについて説明していることにあるのではない。人類の歴史の諸時期の区分、およびその諸時期におけるの継起の一定の規則、すなわち“神々”の時代から“英雄”の時代、“英雄”の時代から“人間”の時代への移行を証明するという試み、以上すべては、ヴィコにおいてはなお、純粋に幻想的な特徴とまじり合ったものであった。

しかしヴィコが明らかに視見し、且つデカルトに対してははっきりとした決定的な態度で擁護したところのものは、（歴）史的認識の方法論的独自性と方法論的固有価値である。そしてかれはこの価値を、純粋数学的な知識の価値の上におくことをためらわない。そしてこの価値においてはじめてかの“人間の科学”（sapientia humana）の真実の充実を見出すことをためらわない。……

自然認識ではなくて、人間の自己認識が、ヴィコによれば、われわれの知識の本来の目標を形成する。もし哲学が、この点に関して、その任に当る代りに、神の乃至絶対的な知識を渴望するならば、哲学はそれによって自己の限界をふみこえ、危険な迷妄の道に誘い込まれることになる。何故なら、認識の最高の規則は、ヴィコにとっては次の命題であるから、いかなる知識も、自らが産み出したところのものを、もっぱら真理とみとめ、且つ真理として扱う。われわれの知識の範囲は、われわれの創り出すところの範囲以上に達することはない。人間はもっぱら人間が創造したかぎりにおいて理解する。……

数学もまたこの事情において（すなわち自ら作りしものが真理であるということにおいて）、数学が明証性と確実性を所有するところを負っている。何故なら数学は、数学が形どろうとする物理的（自然的）・現実的諸対象に関係するのではなくて、思惟が自由な構想で産み出す理想的な諸対象に関係する。しかしもちろんこの構想は、数学に特有な価値と同時に、数学がふみこえることのできない限界をしるしづける。数学がとり扱う諸対象は、人間の精神が諸対象に付与したかの抽象的な存在以外の存在を所有してはいない。それ故これは、われわれの認識がそれを定立しているのをみながら行う避けえざる二者択一なのである。数学は、或いは“現実的なもの”を目指すことができる。しかしこの場合、数学はその対象を完全には透見しておらず、対象をもっぱら経験的・個別的に、個々の徴識や符徴に従って記述することができるだけである。…神話、言語、宗教、詩作。これは人間の認識に真実に適合している諸対象である。そしてこの対象へと、ヴィコは、先ず第一に、かれの“論理学”の構築において目を向ける。先ず最初に、この論理学は、客観的認識の範囲、数学及び自然科学の範囲を突破し、その代りに文化科学の論理学として、言語、詩歌、歴史の論理学として構成することを敢行する。……」

「真理は作られたものである」verum est ipsum factum.（数学、自然科学、いわゆる文化科学から文学までを含めて、すべての科学や学問において）——この斬新な主張は、ヴィコが著者に「新しい学」“Scienza nuova”というタイトルを与えた自負にふさわしい。数学的・幾何学的真理も、人間の理性の所産であり、だからこそ客観的对象に妥当するということは、カントを先取りしており、カントが、幾何学になぞらえて自然科学的認識におけるコペルニクスの転回をいえた事実を反証している。

ヴィコの思想はそれにとどまらず、「カント以上にカント的であった！」かの Fiktion の哲学者ファイヒンガー Haus Vaihinger (1852~1934) を先取りしている。かれは人間の理論的、実践的、宗教的活動を支える真理に、人間自らがつくり出した虚構をみたのである。カントもファイヒンガーもヴィコに関心を払わなかったのであるが、

カッシーラーは Vico-Herder-Dilthey の系譜を骨

太く描いているが、そのこと以上に、今日の真理観に通ずるヴィコ復活のきっかけをつくったことによってまさに真理に貢献している。

### 文献資料

第一次資料 (Primärbibliographie) としては、基本的にはすべての哲学上の古典が挙げられねばならない。(そこでここではそのすべてを省略する！)

ヨーロッパ思想史見直し作業に関しては、第一次資料という価値基準によってすべてを網羅しうる状態には至っていない。差し当り次の名を挙げる。

Arthur Lovejoy, Paul Hazard, Stuart Hughes, Thomas Kuhn, Alexandre Koyré, Hans Blumenberg など。

標題Bについても網羅しうる段階ではないが、先ず欠かせないものとして—

E. Husserl : Cartesianische Meditationen

“ : Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendental-  
le Phänomenologie

A. Schütz/T. Luckmann: Strukturen der Lebens-  
welt.

H. Gadamer, H. Rombach. など

さらに本文中“有力な武器”とよんだ知識社会学の領域からは、T. Fukukama の諸論文、とりわけ1975年パリ及びチュニジャ滞在後に書かれた以下の諸論稿である。

「ベーコンとロック—様式史論的—考察—」, 「ロック哲学の基本問題—知識社会学的一試論—」(一)(二), 「フッカーとロック—Hierachia et Ecclesia—」, 「世界航海史とジョン・ロック—比較宗教学の濫觴—」, 「ジドニーとロック—Liberty and Property—」, 「ジョン・ロックと自然哲学—In the twilight of probability—」, 「ホブスとロック—Human life as a race and as a pilgrimage—」(上)(中)(下), 「トーマス・ホブス著『ラテン詩自叙伝』—ワガ生涯ハワガ著作ト背馳セズ—」, 「ヴィーコ著『自叙伝』本文及び解説—metafisica, filosofia, e filologia—」, 「思想史における『伝説』(légendes)の諸問題—モンテスキューとヴィーコをめぐって—」など。